

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 24 日現在

機関番号：24601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520023

研究課題名(和文)ハイデガーにおけるエートス論の展開と医学哲学への応用についての研究

研究課題名(英文)A Study on the Development of the Theory of Ethos in Heidegger and the Application of his Philosophy to the Medical Philosophy

研究代表者

池辺 寧 (IKEBE, Yasushi)

奈良県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：00290437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず、人間(現存在)の根本的な態度の一つである聴くことを取り上げ、聴くことは人間が他者との共同存在であることの核心であることを明らかにした。次いで、医療技術の観点からハイデガーの技術論を捉えなおし、現代は医療技術がピュシスに取って替わろうとしており、人間はそれぞれが独自の身体を生きることが看過されていることを指摘した。さらに、ハイデガーが人間を「喜びと痛みの間」と捉えていることを踏まえて痛みを主題にした研究を行い、人間は痛みから逃れられないこと、このことが医療の原点であることを論じた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I dealt with three issues. First, I discussed the listening, which is one of the fundamental actions of the being of man (Dasein). I showed that the listening is the core of what man is being-with others. Secondly, I reconsidered Heidegger's conception of technology from the point of view of the art of medicine. I pointed out that in modern times the art of medicine may replace physis and that we tend to forget that everyone is his or her own body. Thirdly, I studied the problem of pain based on Heidegger's understanding of man; Heidegger understands that man lives between joy and pain. I showed that the root of medicine consists in what man cannot escape from pain.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ハイデガー エートス 医学哲学 聴くこと 医療技術 痛み

### 1. 研究開始当初の背景

近年、ハイデガーに倫理的な問題意識を見出そうとする動きが活発になっており、ハイデガーと倫理学を主題にした研究書も相次いで出版されている。また、特にアメリカの看護学界において、ハイデガー哲学を援用して看護行為を哲学的に基礎づけることが試みられている。本研究では最近の研究動向を踏まえ、ハイデガーの思索における倫理的な問題意識を提示し、それに基づいて、医療行為全般にわたっての基礎づけを行うことを試みる。

今日、生命倫理学や医療倫理学の観点から、医学や医療のあり方を論じる哲学・倫理学の研究者は多い。だが、医学はどうあるべきかを論じる医学哲学の研究は等閑に付されている。本研究では、ハイデガーによる存在の思索をエートス論と解釈し、それを手がかりにして医学のあり方を論じる。

### 2. 研究の目的

ハイデガーの哲学的な思索は一言で言えば、存在の思索である。本研究では、存在の思索をエートス論と解釈し、ハイデガー哲学を讀解する新たな視点を提示することをめざす。エートスというギリシア語には、住居、習慣、性格などの意味があるが、ハイデガーは特に住居という意味に着目する。人間がいかに住んでいるか、いかなる態度をとっているか、その仕方を言い表しているのがエートスである。人間は存在を了解し、了解することで存在者と関わっていくことができるが、こうした人間の根本的態度をハイデガーはエートスとみなしている。そのかぎり、人間はエートスによって規定された存在である。

ハイデガーによる存在の思索は、人間の存在やさまざまな行為を成り立たせ、社会や歴史を存立させる基盤を問う営みである。本研究では、このことを具体的に明らかにするために、ハイデガーを手がかりにして医学哲学の構築を試みる。つまり、ハイデガーが提示した人間の本質や行為の本質を、医学の本質を問う医学哲学の構築へと応用していくことを試みる。そして、この試みを通じて、存在の思索が人間の生存に密接に関わっていることを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 聴くことは医療者 - 患者関係を考えるうえで重要な要素である。ハイデガーは臨床現場における聴くことについて取り上げているわけではないが、彼の論述は聴くという人間の態度について重要な示唆を与えてくれる。彼は良心の呼び声を聴くことや、存在への聴従帰属なども論じているが、本研究ではそれらには立ち入らず、他者の話を聴くことに焦点を当て、聴くことを論じることにする。

(2) ハイデガーは技術の本質を問うことで、

技術時代における人間や社会のあり方を論じた。ハイデガーの技術論は、今日の科学技術の問題点を自然との関連で考察する文脈で研究されることが多い。それに対して、医療技術の観点からハイデガーの技術論を論じた研究はほとんどない。というのも、ハイデガーが技術の本質を問うとき、医療技術を取り上げることはあまりないからである。しかし、人間の生に深く関わる医療技術を取り上げずに、技術の本質を問うことはできない。そこで本研究では、ハイデガーが医療技術やバイオテクノロジーに関して述べている箇所を整理し、医療技術の観点からハイデガーの技術論を捉えなおすことを試みる。

(3) 従来のハイデガー研究では、痛みが主題的に取り扱われることはあまりないが、痛みはハイデガー哲学を讀み解く視点になりうる主題である。研究代表者はすでに、「ハイデガーと痛みの問題」(『シェラー研究』第2号、2009年)、「痛みの意味と医療」(『医療と倫理』第9号、2013年)を公表している。本研究ではこれまでの研究成果を踏まえ、痛みの問題にさらに取り組む。痛みの除去・緩和は、一方では医療の原点に位置づけられるが、他方では人間であることを否定する営みである。こういった痛みの両義性を念頭に置いて、人間における痛みの問題を考察する。

### 4. 研究成果

(1) 本研究では、ハイデガーが他者をどのように捉えているのかを聴くことの観点から明らかにした。他者は私と同じ存在性格を有するといっても、私とは絶対に異なった存在、言い換えれば、私が自己へと同化することのできない存在である。このような他者との「通路」となるのが、聴くことである。もっとも、他者との「通路」は聴くことによってはじめて開かれるのではない。「通路」ははじめから開かれている。というのも、他者に対して「通路」が開かれていなければ、聴くことは不可能だからである。お互いに聴き、了解しているがゆえに、人間(現存在)は相互共同存在と性格づけられるのであり、同時に「根源的な相互共同存在という存在構造」に基づいているがゆえに、他者に耳を傾けて聴くことが可能になる。聴くことは、人間が他者との共同存在であることの核心である。

聴くという態度には、特に意識することなく自然に聞こえる場合と、注意深く聴く場合の二つの様態がある。ハイデガーも聴くことを、何もしなくても、あるいは意に反しても耳に入ってくるような聴くことと、聴き手が全身を耳にして、何かあるものに聴き入ることとしての聴くことの二つに区別している。むしろ、ハイデガーが重視するのは後者のほうである。彼によれば、傾聴的に聴くことは耳を用いて行われるが、耳という感覚器官の作用が聴くことをもたらすのではない。傾聴とは、人間が世界のうちで出会われるも

のに根源的に開かれている態度のことである。

ハイデガーも傾聴における耳の働きを看過しているわけではない。「全身を耳にしている」という慣用句への言及はこのことを端的に示している。彼にとって聴くことは耳を通じて、さらには身体全体を通じて他者と対話したり様々な事物と関わったりする「身体を生きることの仕方」にほかならない。全身を耳にしているといえるのは、聴くことに集中し、傾聴しているものへと純粹に身を置き移し、音が押し寄せてくることや耳をまったく忘れておるときである。音や耳を忘れて聴き入っているときには、耳にしているものにまったくとらわれていない。音声など、感覚的に聴き取られるものはもはや重要ではない。ハイデガーはこのように考え、「聴き入ることは、まさしく聴き取られたもの、聴き取っているものをすでに聴き落としてしまっている」と述べる。

他者が語ることを聴く場合には、音声は押し寄せてくることを忘れて聴き入ることがあるにしても、そもそも音声はなければ聴くことは生じない。しかも、語り手の声の大きさや速度、抑揚などは、聴き手の理解を大きく左右する。そのかぎり、音声を忘れて聴き入ると簡単には言えない。だが、音についてのハイデガーの記述が、他者が語ることを聴く場合には妥当しないというのではない。むしろ、聴くことと音の関係について適切に言い表していると思われる。他者が語っていることが不明瞭であるため、その語りを理解しない場合、われわれは差しあたっては理解できない語を聴いているのであって、単なる音声データを聴いているのではない。われわれは音声ではなく、言われたことを差しあたって理解しているから、もしくは、話題になっていることを理解しようという思いを抱いているから、声の大きさなどが問題になり、聴き取りやすい・聴き取りにくい、わかりやすい・わかりにくいといった「話し方を評価する可能性」が生じてくるのである。

対話と言え、通常、一方が語り、他方が聴き、今度は立場が替わって、他方が語り、一方が聴き……という一連の行為が図式的に思いつく。この図式に従えば、聴くことは語ることに応じて生じる。しかし、われわれは自分の話を聴いてくれる人に、自分の考えや感情などを理解してもらおうとして語る。聴いてくれる人がいるから語るのである。そうしたことを踏まえると逆に、語ることのほうが聴くことに応じて生じているといえる。ハイデガーも、「聴くことができることは相互に話し合うことの結果などではなく、むしろ逆に、そのための前提である」と述べている。聴くことから、対話は生まれる。ハイデガーは相互に語り合うことに相互共同存在の特性を見出しているが、お互いに聴くことができることから対話は生まれるゆえ、聴くことは相互に語り合うこと的前提に位置づ

けられる人間の態度である。

(2) ハイデガーによれば、健康とは「調和」であり、「病気とはただ単に故障であるにとどまらず、すべての状態にわたって支配している現存在全体の倒錯である」。倒錯から調和への健康回復は、自然が行うものである。最先端の医療技術を駆使することによって、以前は不可能であった治療ができるようになって、医療技術がピュシスに取って替わることはできない。医療技術の本来の目的は健康の維持・回復にある。この目的が達成されると、医療技術はいわば消失する。

ところが、現代はこの本来の目的を逸脱し、医療技術がピュシスに取って替わり、人間が自己自身を技術的に製作しかねない時代である。自らの身体限界を超えようとする人間の欲望・需要に応じて医療技術は開発されるが、技術の開発は新たな欲望・需要を生み出し、それに応えて新たな技術がさらに開発される。欲望と技術開発の連鎖は止まるところを知らない。もっとも、医療技術が進歩し、より長く生きられるようになったからといって、より健康でいられるとはかぎらない。ましてや、医療技術が人間の生と死のすべてを意のままにできるようになれば、健康という自然（調和のとれた状態）ももはや存在しなくなるであろう。

ハイデガーは現代技術の本質を、すべてのものを役に立つものへと用立てていく点に見出し、ゲシュテル（総かり立て体制）と名づけた。人間もまた、ゲシュテルのなかに組み込まれており、役に立つものへと用立てられている。用立てることを遂行するのはもちろん、人間にほかならない。しかし、用立てることは自己展開していく一連の連鎖であり、人間によって制御可能な人間の行為ではない。そこでハイデガーは人間を「用立てることの幹部」と捉え、自然エネルギーよりもいっそう根源的に用立てることへと挑発されているとみなす。技術時代である現代においては、人間はそれぞれ独自の身体を生きることが看過され、取り替え可能な断片や人的資源とみなされているのである。

ハイデガーによれば、自然科学は人間の身体を「単なる物体」とみなす誤解のうえに成立している。この誤解は「科学に対する方法の勝利」に起因する。自然科学が成立した背景には、人間が尺度を与える主観となり、研究可能なあらゆる存在者が客観、つまり、対象になったことが挙げられる。存在者が対象とみなされ、その対象性において表象されるときのみ、測定することは可能になる。存在者を数量的に規定していく自然科学にとって、測定可能性は決定的な役割を有するものである。測定可能性に基づき、われわれは自然の事象において当てにできること、予想しなければならないことを保証する知識が得られるよう、自然を研究する。測定可能性とは算定可能性のことである。問題は、測定

の対象が身体である場合である。この場合、身体をどう捉えるかという問題が生じてくる。したがって、「科学の方法の問題は身体の問題と同一である」とハイデガーは言う。

ハイデガーは、身体を単なる物体とみなす、この誤解を自然科学における出来事と捉えている。だが、それだけでなく、この誤解は医療行為においても問題となる。医療行為においては、医療者は解剖学や生理学などの知識に基づいて患者の身体を対象として扱うであろうし、患者自身も自らの身体を物体とみなしてしまいがちであるからである。医師が健康回復を意のままにすることは、テクネーがピュシスに取って替わることにほかならないため、ハイデガーはこれを否定する。そのうえで医師であることとしてハイデガーが主張しているあり方は、身体を生きる人間であることである。彼はこれ以上のことを述べていないが、医療技術の発達がめざましい現代においては、医師が患者の生きられた身体と向き合うことなく治療を行いかねないことを示唆しているといえる。

以上のように本研究では、ハイデガーが医療技術に関して断片的に述べている箇所を整理し、ハイデガーは医療技術の今後の動向も考慮していることを明らかにした。このことにより、ハイデガー哲学を医学哲学へと応用するための一つの視点を提示した。

(3) ハイデガーは人間を、「誕生と死の間」「喜びと痛みの間」などの間を生きる存在と捉えている。これらの中に、グッツォーニになって「健康と病気の間」を付け加えると、死、痛み、病気という「生に属する影の側面」(フェッター)が揃う。これらはいずれもできれば避けたい「影の側面」である。人間は、こういった側面が一方の極にある間を生きている。そうであるかぎり、痛みをなくそうとする取り組みは、一方では原点に位置づけられる医療の重要な役割であるが、他方では人間であることの根源を否定しかねない営為である。

慢性的なひどい痛みを襲われると、われわれは身を引き裂かれるような思いにとらわれる。ひどい痛みは現実の認識をゆがめ、人としての統合性も脅かす。ハイデガーはそのような痛みを「裂け目」と言い表す。ひどい痛みを苦しむ者の思いや注意は痛む一点に集中し、立つ、座る、話す、等々、何をすることも痛みを悩まされながら行われることになる。痛みがすべてを支配する中心的現実となる。そのことによって、過去の種々の思い出も未来に対する期待も打ち消され、存在するのは痛みを苦しむ現在だけになる。痛みを苦しむ者は、他の誰も自分と同じ痛みを感じていないことを知り、このうえない孤立感を抱くようになる。痛みは、痛みを苦しむ者の時間や世界を混乱に陥れるのである。

痛みは、人間であるかぎり誰かが免れないという点では普遍的な現象であるが、その

一方で、当人が感じている痛みは他人には計り知れないという点ではきわめて個人的・主観的な体験である。特に類似の痛みを体験したことのない他人から見れば、痛みは未知の領域に属する現象である。ところが、自分が感じている痛みを他人に伝えようとしても、適切な言葉をなかなか思いつかない。「痛み」に特有な言葉がないからである。そこで痛みを苦しむ者は、自分の日常の経験のなかから適切な言葉を探したり、新たに言葉を作り出したりしなければならない。言葉を探す・作り出すといっても、もとより「痛み」に特有な言葉は存在しない。自らが感じる痛みを言葉で具体的に説明するためになしうることは、比喩を用いて語ることであり、しかも、往々にして実際には体験したことのない比喩を用いて語ることになってしまう。聴き手はもちろんのこと、語り手自身も体験したことのない比喩をもとに語っているかぎり、十分な意思疎通を図ることはほとんど不可能である。

したがって、患者の痛みの体験を理解しようとするのに努力をしても、医療者が理解できることは「おぼろげな断片」にすぎない。だが、たとえ断片しか理解できなくても、その断片を理解しようとするのが医療者にとっては何よりも大切な営みである。ところが実際には、患者のあやふやな断片的な言葉を客観的なデータとすることができないため、医療者は患者の声を信用できない無視すべきものと取り扱いがちである。むしろ、無視されてよいものではない。苦しむ患者の声を聴くことは、「人間存在としてのわれわれが負う最も困難な義務の一つ」(フランク)にほかならず、医療者にも当然求められることである。

もっとも、シャロンが批判するように、「残念なことに、医療者は患者が自己について語ることを、診断的・解釈的に聴取しつつ傾聴する能力を身につけていない」。彼女はここで二つの能力を医療者に求めている。つまり、患者の話を聴きながら、医学的な観点から診断・解釈することと、患者の体験を理解することである。前者の能力に長けているだけでは十全とはいえない。痛みの除去・緩和は万人の願いであり、医療に求められる重要な役割である。だが、患者が痛みをいかに体験しているのか、患者が痛みを抱えていかに生きているのか、これらのことが十分に理解されないまま、痛みの除去・緩和が実施されたならば、技術的な目的は達せられるかもしれないが、「医療の半面」(シャロン)でしかない。医療に求められるのは人間らしい生活の維持・回復であって、痛みの除去・緩和はあくまでその手段である。医療の原点は痛みを取り除くことだけでなく、それとともに、あるいは、それ以前に、人間らしい生活を妨げる痛みの存在であり、人間であるかぎり痛みから逃れられないことである。

(4) 聴くことや医療技術は従来のハイデガー研究ではあまり着目されていない主題であるが、これらを主題にした研究を通じて、本研究の課題であるハイデガーにおけるエートス論の展開や医学哲学への応用について、一定の研究成果を挙げることができた。また、ハイデガーが人間を「喜びと痛みの間」と捉えているのを踏まえ、医療の原点ともいえる痛みの問題について一定の見解を提示することができた。今後も、ハイデガー哲学を思想的基盤に据え、医学の本質を問う医学哲学の研究を継続して実施していく予定である。

(3) 連携研究者  
なし

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

池辺 寧、「ハイデガーの技術論再考 医療技術の観点から」、『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』、査読無、11号、2015年、33 - 42頁。

池辺 寧、「人間存在と痛み 哲学的考察」、『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 査読無、18巻、2014年、85 - 100頁。

池辺 寧、「ハイデガーと聴くことの問題」、『ぷらくしす』(広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター) 査読有、14号、2013年、133 - 141頁。

[学会発表](計3件)

池辺 寧「ハイデガー技術論再考 技術とエートス」、『第47回広島倫理学会、2014年8月21日、広島市文化交流会館(広島県広島市)』

池辺 寧「痛みと医療」、『広島倫理思想史学会第82回大会、2013年11月3日、鈴峯女子短期大学(広島県広島市)』

池辺 寧「ハイデガーと聴くことの問題」、『第45回広島倫理学会、2012年8月21日、門司港ホテル(福岡県北九州市)』

[図書](計1件)

池辺 寧(共著)『教養としての生命倫理』、丸善出版、2015年、印刷中。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

池辺 寧 (IKEBE Yasushi)  
奈良県立医科学・医学部・講師  
研究者番号：00290437

(2) 研究分担者

なし